萬葉集略解

十上

柳田文庫
文庫11
A 104
13

柳田國男
A 10k 13

萬葉集卷第十

春雜歌

雜歌七首○詠鳥二十四首○詠霞三首○詠柳八首○詠花二十首○詠月三首○詠雨一首○詠川一首○詠煙一首○野遊四首○歎舊二首○懽逢一首○旋頭歌二首○譬喩歌一首

春相聞

相聞七首○寄鳥二首○寄花九首○寄霜一首○寄霞六首○寄雨四首○寄草三首○寄松一首○寄雲一首○贈蘰一首○悲別一首○問答十一首

夏雜歌

柳田泉文庫
48 10651

詠鳥二十七首○詠蟬一首○詠榛一首○詠花十首○
問荅二首○譬喩一首

夏相聞

寄鳥三首○寄蟬一首○寄草四首○寄花七首○寄露
一首○寄日一首（今本日を目ニ誤れり）

秋雜歌

七夕九十八首（子遊羣十そと標せり此遊羣二字ハ原の第の歌の末句の詞なるを誤て今文ニ此二字を別ニ書出せしより目録にも混してかゝる故を改つ）○詠花三十四首○詠鴈十三首（詠鴈三をとえて次へ）○詠鹿鳴十
六首○詠蟬一首○詠蟋蟀三首○詠蝦五首○詠鳥二
首○詠露九首○詠山一首○詠黄葉四十一首○詠水
田三首○詠河一首○詠月七首○詠風三首○詠芳一
首○詠雨四首○詠霜一首

秋相聞

相聞五首○寄水田八首○寄露八首○寄風二首○寄
雨二首○寄蟋蟀一首○寄蝦一首○寄鴈一首○寄鹿
二首○寄鶴一首○寄草一首○寄花二十三首○寄山
一首○寄黄葉三首○寄月三首○寄夜三首○寄衣一
首○問荅四首○譬喩歌一首○旋頭歌二首

冬雜歌

雜歌四首○詠雪九首○詠花五首○詠露一首○詠黄
葉一首○詠月一首（今詠の字を脱せり）

冬相聞

相聞二首○寄露一首○寄霜一首○寄雪十二首○寄
花一首○寄夜一首

春雑歌

久方之天芳山此夕霞霏霺春立下

ひさかたのあめのかぐやまこのゆふべかすみたなびくはるたつらしも

ふるめかしけし

巻向之檜原丹立流春霞欝之思者名積米八方

まきむくのひばらにたてるはるがすみおほにしおもはばなづみこめやも

是ハ家の歳お開之。家ハ杉のしきていちん席あく。さて下のハおるま

みおもで流きまらんやといふ

古人之殖兼杉枝霞霏霺春者来良之

いにしへのひとのうゑけんすぎがえにかすみたなびくはるはきぬらし

これもよのつきるまて是ら山の杉なるべし。古への人のうゑんとハロへ事経さるといふのこと

子等我手乎巻向山丹春去者木葉凌而霞霏霺

こらのそでをまきむくやまにはるされば このはしぬぎて かすみたなびく

こらがそでを枕詞、あそびぬぎてハ木の葉のあそびまでそのよし

玉蜻夕去来者佐豆人之弓月我高荷霞霏霺

かぎろひのゆふさりくれば さつひとのゆづきがたけに かすみたなびく

かぎろひの、さつひとの枕詞、巻七巻向くの山[illegible]とあれバ大和城上郡之

今朝去而明日者来牟等云子鹿丹旦妻山丹霞霏霺

けさゆきて あすはきなんと いひしこの あさつまやまに かすみたなびく

紀づまいふ山の名ハよろしく紀伊ハまたあたりまんといふ妻の契りこそなる

めぐらし紀妻山ハ就のさつけての、鹿丹の相聞をもたせ語まあらんか、考べし、

天武紀九年九月癸酉朔辛巳幸于朝嬬云々、仁徳紀の皇后阿佐豆麻能遊(アサヅマノヒ)

箇能烏瑳箇烏(カノヲサカヲ)云々、又姓氏録太秦宿祢の先祖と、大和朝津間腋上地に居

らむるすゑとなる、大和葛上郡之近江を見んだ名もあれどおなし

子等名丹関之宜朝妻之片山木之尓霞多奈引

こらがなに かけのよろしき あさづまの かたやまぎしに かすみたなびく

関をそ開ヲ誤れ了、元暦本ニよろしく改、この所よろしき鎮おハ[illegible]

のよきといふべ、妻くまむさき鎮の宜しくこと、妻二字たゞ其の鎮なく[illegible]

妹がなと共せのかるうけハいふかあらん、もら有だ、さて妻とのべん辞の[illegible]

右柿本朝臣人麻呂歌集出

詠鳥

打霏春立奴良志吾門之柳乃宇禮尓鶯鳴都

うちなびく はるたちぬらし わがかどの やなぎのうれに うぐひすなきつ

うちなびく枕詞、霞とうちなびくと見ゆれど、卯ハ春ハ然あれバても麻の字

め直やまれるこの

梅花開有崗邊爾家居者乏毛不有鶯之音

うめのはなさけるをかべにいへをればともしくもあらずうぐひすのこゑ

六帖にハいへしあれバとあり。いへをれバといへるぞまさるべき。乏の例ハ上にいへり

しきハとぼしくなき也

春霞流共爾青柳之枝喙持而鶯鳴毛

はるがすみながるるなへにあをやぎのえだくひもちてうぐひすなくも

霞のたなびくが水の流るるごとくゆるゆるとあれバ、長流とかけり。共ハなへとよむ

よみたれど、こハなへとよむべきなり。喙もの、くひものを、巻十六に白鷺の

ほころびそめてとよめり

吾瀬子乎莫越山能喚子鳥君喚變瀬夜之不深刀爾

わがせこをなこしのやまのよぶこどりきみよびかへせよのふけぬとに

大和の巨勢山をなこせといひけるか。巻七にこちこせとハ表裏にて、

わが方より帰る夫をとどめさしめぬとのなこせ山とよめるなり。變ハ借字、

よびかへせ也。刀尓ハ継体紀にうかれて手魔伊祢矢度你といふと同じく、刀尓ハ

時尓の意也

朝井代爾来鳴杲鳥汝谷文君丹戀八時不終鳴

あさゐでにきなくかほどりなれだにもきみにこふれやときをへずなく

ゐでハ堰(ヰド)ともかけり。されどここに堰といふべくもあらず。ある説の旨

もいふべし。此下にも朝戸出之とよめるあれバ、ここハ井ハ戸の借なり、あさとで

ならんべし。杲音高きかほのことにかよへり、かほる鳥は綺まで鳴

ハなきやまずして頻に鳴をいふ。貌鳥とかけるがよく、悲しく聞ゆれバ今也

頻に鳴とかいふ

冬隱春去来之足比木乃山二文野二文鶯鳴裳

ふゆごもりはるさりくらし、あしひきのやまにものにもうぐひすなくも

在ハ去ノ誤

紫之根延横野之春野庭君乎懸管鶯名雲

むらさきのねばふよこののはるのにはきみをかけつゝうぐひすなくも

仁徳紀十年冬十月築横野堤、神名帳河内国澁川郡横野神社あれば、この内なり、二の句ハことばのさまをいへるのミ、かけつゝハ、あはれと君をおもひつゝといへる、鶯ものいふかもの也

春之在者妻乎求等鶯之木末乎傳鳴乍本名

はるされバつまをもとむとうぐひすのこぬれをつたひなきつゝもとな

在ハ去とあるべし、又唐本に此歌下に二首春之在者とあり、古本を得れバさもあるべけれど、旧本のまゝにてことあれバうたがひてからくよみてかられハ疑はる也、鶯のつまかなしとよめる例も有なり

やさしきことなり

春日有羽買之山従猿帆之内敞鳴往成者孰喚子鳥

かすがなるはがひのやまゆさほのうちへなきゆくなるハたれよぶこどりぞも

卷二羽易の山とあり、さほを猿帆とかけるハ和名抄下総猿島作之とあるの類之

不答爾勿喚動曽喚子鳥佐保乃山邊乎上下二

こたへぬになよびとよめそよぶこどりさほのやまべをのぼりくだりに

答ぬをこれハよみ人の心也　おもひてよめるならんこそすく　かなしとよむべし帝

まゝ也しとも有り

居ノ下之ハ者ノ誤

梓弓春山近家居之續而聞良牟鶯之音

あづさゆみはるやまちかくいへをれバつぎてきくらんうぐひすのこゑ

居之の之ハ者の字を誤れるなりと宣長いへり

米ハ末ノ誤

打靡春去来者小竹之米丹尾羽打觸而鶯鳴毛

うちなびくはるさりくれバさゝのうれにをはうちふれてうぐひすなくも

うちなびく枕詞、又本小竹之末とあり、和名抄、小竹篠のこと、又唐本米を末とす

作者くさぐさのうれへ有けり、巻十二小竹之上尓きゐてなくとりとよみたれば、未
とすみみるべし、鶬ハ借字にて振也、ちいさきものゝはかなきのさま

朝霧爾之怒怒爾所沾而喚子鳥三船山従喧渡所見

あさぎりにしぬぬにぬれてよぶこどりみふねのやまゆなきわたるみゆ

之磨奈怒こを努て訓、しぬゝハ次下ニ小竹野尓所沾而とも有り、さびしさ
同じく之佐志がくちずくよみしき、小雨そぼふるとはよそひも同じ、みふねの山ハ
吉野にあり既にいへり、此下ニ三吉野の高嶺の次の歌より春雪とよめれば、ここ
ハ詠雪とあらんを落失しなるべし

打靡春去来者然為蟹天雲霧相雪者零管

うちなびくはるさりくればしかすがにあまくもきらひゆきはふりつゝ

てをきらふハ雲の霧むといふ、雪ふるべし、しのゝめのふかきあとといふ、
しのゝめのハ、しのゝみだれ、きそのかわよりすれば、既に出

梅花零覆雪乎裹持君爾令見跡取者消管

うめのはなふりおほふゆきをつゝみもてきみにみせんととればけにつゝ

梅花咲落過奴然為蟹白雪庭爾零重管

うめのはなさきちりすぎぬしかすがにしらゆきにはにふりしきりつゝ

梅ハさきちりてあるを、しかしながら雪ハこれにかさねて降といふ

今更雪零目八方蜻火之燎留春部常成西物乎

いまさらにゆきふらめやもかぎろひのもゆるはるべとなりしものを

まへ歌の俤をつゞきてよめるにて、かぎろひハ巻一に既出

風交雪者零乍然為蟹霞田菜引春去爾来

かぜまじりゆきはふりつゝしかすがにかすみたなびきはるさりにけり

巻五ちらす風まじり雨の降夜の雨まじり雪のふる夜はとよめるに

山際爾鶯喧而打靡春跡雖念雪落布沼

やまのまにうぐひすなきてうちなびくはるとおもへどゆきふりしきぬ

峯上爾零置雪師風之共此間散良思春者雖有

をのうへにふりおけるゆきしかぜのむたこゝにちるらしはるにはあれども

雪しのしは助辞、むたはとゝもにと同じ

右一首筑波山作

為君山田之澤恵具採跡雪消之水爾裳裾所沾

きみがためやまだのさはにゑぐつむとゆきげのみづにものすそぬれぬ

ゑぐは巻十一にも山沢恵具ともよめり、東国にてはゑごといひ、ちかき人

はゑぐとよめり、葉は蘭に似てちさく、根は白くふき芋のごとくなるもの也

小池などにもあるもの也、ねとりてくふもの故、考の説によろし

梅枝爾鳴而移徙鶯之翼白妙爾沫雪曽落

うめがえになきてうつろふうぐひすのはねしろたへにあわゆきぞふる

うつろふは移徙とかけりうつるなり

山高三零来雪乎梅花落鴨来跡念鶴鴨

やまたかみふりくるゆきをうめのはなちりかもくるとおもひつるかも

一云梅花開香裳落跡

ちりかものかもは疑辞、末のかもは哉也

除雪而梅莫戀足曳之山片就而家居為流君

ゆきをおきてうめをなこひそあしびきのやまかたづきていへゐせるきみ

ちかくは梅のはなちらんもをしむるは梅とあるかたに雪をもてあそぶ人のやまがつきていへゐせるさまを

とりて雪をしのぶ人をよめるにて、そのれと見るべし、かたつき

つきてはかたよりてといへる、考には片付つきて

ともよめり

右二首問答

詠霞

昨日社年者極之賀春霞春日山爾速立爾来

きのふこそとしハはてしかはるがすみかすがのやまにはやたちにけり

巻九吾船将極（ワガフネハテン）とまりしらずもとあれバはてもきはまるよしなり

寒過暖来良思朝烏指淳鹿能山爾霞軽引

ふゆすぎてはるきたるらしあさひさすかすがのやまにかすみたなびく

寒暖朝烏ハ義をもてかけり、朝日さしたる山の景色をいへり

鸎之春成良思春日山霞棚引夜目見侶

うぐひすのはるになるらしかすがやまかすみたなびくよめにみれども

鸎ハ春をつぐるとりなれバ、そのこゑをきかずとも白く見えてたなびけるにつけて

さて夜目見れどもといへる、此一本末にある書きるしとも訓べし、

いづれもよろしかるべし

詠柳

霜干冬柳者見人之蘰可為目生来鴨

しもがれしふゆのやなぎハみるひとのかづらにすべくもえにけるかも

冬字干と十と作れり、見ハ良の字の誤なるべしと翁の

それき

浅緑染懸有跡見左右二春楊者目生来鴨

あさみどりそめかけたりとみるまでにはるのやなぎハもえにけるかも

浅く無孔也

山際爾雪者零管然為我二此河楊波毛延爾家留可聞

やまのまにゆきハふりつゝしかすがにこのかはやぎハもえにけるかも

青やぎとしいへバかはやぎといふべし

山際之雪不消有乎水飯合川之副者目生来鴨

やまのまのゆきハけざるをたゞのれあふかなのそられバかえるにくるこのも

ちのおとの荒れるべし水飯会よむべしと飯ハ激の字の誤りてみるなきらよろるべし

こちぎらに八頭に山川のそくれバ花みいなりろハそひ柳よりこさ柳ハかずしてかえるに

くるのてによめる八頭のひらに荒くハきざしてニ箇あ已ハ咲てよるるのも事ニ字ま数

の村あにくるこもとよみるなく成偽集中みえたし

朝旦吾見柳鸎之来居而應鳴森雨早奈禮

あされさるわがみるやなぎにうぐひすのきゐてなくべくもりにはやなれ

森字すこし木きの類とまり字読森木長良伊与こ加尓

青柳之絲乃細紗春風雨不亂伊閒雨令視子裳欲得

あをやぎのいとのほそさをはるかぜにみだれぬいまにみせむこもがも

絲乃細紗田字ハ緑乃細緒とまし可能ゐやまるべみだれのいとのまぐ刈べしと

ありそれき称みるべし伊間の伊ハ助辞なく間乱間ぞく

百礒城大宮人之鶵有垂柳者雖見不飽鴨

もゝしきのおほみやひとのかづらけるしだりやなぎハみれどあかぬかも

かづらけるハかつらにせしよしにて柳をかきとしよりかけ

梅花取持見者吾屋前之柳乃眉師所念可聞

うめのはなとりもちみればわがやどのやなぎのまゆしおもほゆるかも

家を離れて居る人梅を折りて見て吾宿の柳をおもひ出て妻に会ひたき心を

詠花

鸎之木傳梅乃移者櫻花之時片設奴

うぐひすのこづたふうめのうつろへばさくらのはなのときかたまけぬ

うつろふハ散るをいふ枝によるつたいに花をのせく地る落れバうつるといへり

片まけハ時を待

櫻花時者雖不過見人之戀盛常今之将落

けふふるよときハちぎりてぞみるひとのこひのさのわざハまりちるらん

箋云てるハおしねど人のめづるさかりにてちるらんといふ六古今集

わくぐこゝ思ひそん本ハちるれるめぞあるる後のちゞそれがらみなおさく

ひくさのありくれバ人ぞうらきりたえちるん。わりて某もそのうけれバなど

よぶくれてらんん

我刺柳絲乎吹乱風尓加妹之梅乃散覧

わがさせるやなぎのいとをふきみだるかぜにかいものうめのちるらん

毎年刺柳とさしよみて柳ハ枝をさし刺てよくおふるものなれバかく

いつハ妹がかどの梅をおもへるにて

毎年梅者開友空蝉之世人君羊蹄春無有来

としのはにうめはさけどもうつせみのよのひときみしはるなかりけり

巻十九詞往に毎年謂之等之乃波とあり、君ハ五ロの字の誤まりてよのひと

わすしたるべし。梅ハ咲ぞとみれさけし。現身の人。咲る君ハ梅のまへに逢

めくはすを得ねと歌くて、羊蹄をしのかるに用ゐるに渡にいへり

打細爾鳥者雖不喫縄延守巻欲寸梅花鴨

うつたへにとりははまねどしめはへてもらまくほしきうめのはなかも

うつたへハひたすらのこゝろ。本に狩猟をもはふるよそをうつくしく人まく

とハふれぬよしのこゝろにてよめり

馬並而高山部乎白妙丹令艶色有者梅花鴨

うまなめてたかのやまべをしろたへににほはせたるはうめのはなかも

独白るを見てとてハ一そこのひおもし。北るべてとおもくてハこのあるひ新き

ふるき宮本に馬ハ怨(オモ)の誤なるらんといへり、梅ハ櫻の字の誤なるべし。抄云

本をる法国の本ならねバ高山よおのづから生るのなきと

花咲而実者不成登裳長気所念鴨山振之花

ちらかへさきてみハなかへねどもなのきけにおもほゆるかもやまぶきのはな

山吹の花をよめるハ段ありよりか、それゆゑ山吹之振ハ方利の利を也けり

て侍るは和名抄に款冬をやまぶきとせるハあやまりなり、款冬はふくしく

それは、ちさき草にハ日久しく、抄にも出ず、女のうけひきさくいまさる歌のよと

さくるを楽奇あるが、まぎれてのせたるなるべし

能登河之水底并尓光及尓三笠之山者咲来鴨

のとがはのみなそこさへにてるまでにみかさのやまハさきにけるかも

能登河は添上郡にあり、高圓三笠の二の山の間を西へ流るといへり、花ハ

櫻なるべし、花とのみいひて咲るをよめるも集中に例多し

見雪者未冬有然為蟹春霞立梅者散乍

ゆきみればいまだふゆなりしかすがにはるがすみたちうめハちりつゝ

去年咲之久木今開徒土哉将堕見人名四二

こぞさきしひさぎいまさくいたづらにつちにやおちむみるひともなしに

久木ハ冬の字の誤にて、ふゆきなるべし、集中冬木の梅とも、又冬ハ冬

木の上に降雪ともよみしのぶ、即冬を称せし木のまゝにて咲と

いひ、花も梅のなどのおほく、櫻にても去年の花咲しが冬木と称め

るを、今又春に咲しといふとも見るべし、まゝに久木と字にて久宗

の誤にて、こぞさけるさくらいまさくこのいづれにも久木はさくら

爲の誤れる

足日木之山間照櫻花是春雨尓散去鴨

あしびきのやまのまてらすさくらばなこのはるさめにちりぬらんかも

散の上将の字脱しの

打靡春避来之山際最木末之咲往見者

うちなびくはるさりくればやまのまのとほきこぬれのさきぬるみれば

巻八にもあなびく春来良之山際遠木末のさきゆるみれど今日にのま
まぞといふも最をとく分きて訓べし

春鴩鳴高圓邉丹櫻花散流歴見人毛我裳

きゞしなくたかまとのべにさくらばなちりてながらふるみむひともがも

ながらふるハながるゝを延いへるにて、別散をいへり

阿保山之佐宿木花者今日毛鴨散亂見人無二

あぼやまのさねきのはなハけふもかもちりみだるらんみるひとなしに

阿保山ハ山城の山保のかはらに、伊賀国にあり、阿保氏の本地なるべし、

佐宿木ハ巻十三作楽花とかきたるとおなじく、作楽の二字なるを、

佐宿木三字に誤つらん、さくらのさねはと有しなるべし

川津鳴吉野河之瀧上乃馬醉之花曽置末勿勤

かはづなくよしぬのかはのたぎのへのあしびのはなぞおくまなもれき

馬醉木既にいへり、結句ハむかしより解がたく訓ありしを、宣長ハ勿勤にあはせて

の花ぞおきなゆめと訓るを見るべし、置ハ觸の字の誤、末ハ手の字

の誤にて、てふれそゆめと訓んか、あしびの花と花をしてえらぶる誤にしもあ

るを翁いへれど、室ちう、花鬘のかざしゆゑにとて、蔓ハ著の誤なるべし、

又勿手も首しひそくゆめといへる例なし、又時ハ此にりなん、又服

ハ改めて入れたるものにて、又或人ハ末ハ土の誤として、つちにおくなゆめと訓べし

いづれよいか考べし

春雨相争不勝而吾屋前之櫻花者開始尓家里

はるさめにあらそひかねてわがやどのさくらのはなハさきそめにけり

花の宴に標して、其花の催ニ似たる所を、相争ふるハ巻一相格

春雨者甚勿零櫻花未見尓散巻惜裳

さくらあらそふてよめる例之

はるさめはいたくなふりそさくらばなまだみなくにちらまくもをし

春去者散巻惜櫻花片時者不咲含而毛欲得

はるされバちりまくをしきさくらばなしばしはさかずふゝみてもがも

かみハつぼみ、なをしむ心なるかくハなけれ、櫻一本梅よれる

見渡者春日之野邊爾霞立開艶者櫻花鴨

みわたせバかすがののべにかすみたちさきにほへるハさくらばなかも

何時鴨此夜之将明鶯之木傳落梅花将見

いつしかもこのよのあけんうぐひすのこづたひちらすうめのはなみん

鶯のちらす梅花を見んとて、鳥の鳴を待なり

詠月

春霞田菜引今日之暮三伏一向夜不穢照良武高松之野爾

はるがすみたなびくけふのゆふづくよきよくてるらんたかまつのぬに

三伏一向とあるハ、てんじゆげの、箱ハ三ッ伏ハ向く、てらむかたをとらく

かぞれバ望日の夜の月をいふべし、さる義をとりて暮三伏一向夜をゆふづくよ

と訓るハいかゞなれど、強てあらがふべし、猶よく考へてん、巻十三に根ころく

よする一伏三向とあるハ、去ゆるいふべし、転じて出へバ、松をふかみの

うらよ係れり

春去者紀之許能暮之夕月夜欝束無裳山陰爾指天

はるされバきのこのくれのゆふづくよおぼつかなしもやまかげにして

一云春去者木陰(コカゲ)多(オホキ)暮月夜

このくれハ木之晴なく、木蔭のくらきをいふ、夜桜まうぐれおぼきハ、三宿六

をぐれおぼきとてのせたるか、木のこのくれハ茂きたれバ、一本のこぐれ

おぼきのくるをとるべし、おぼつかなしものしハ助辞

朝霞春日之晩者従木間移歴月乎何時可將待

あさがすみはるびのくれハこのまよりうつろふつきをいつとかまたん

宣長云一二の句ハ春日の霞をくらきと云くれの詞ハこのくれるを

いふ詞ニさくらく春霞のくらき時とハいふてこそ霞のくらき時とよめ

春までのまちくるしきよしをいへるにくれの詞を日の暮と見るハ一首の

意にくれハの八を誦るハわろし

詠雨

春之雨爾有来物乎立隠妹之家道爾此日晩都

はるのあめにありけるものをたちかくれいもがいへぢにこのひくらしつ

まへの歌ハ降出くやまぬ雨のあるをかへてめの雨のやうにおもひて道すがら

ゐながらもきして妹のあたりもおもふて[illegible]日のくれぬるを

詠河

今往而聞物爾毛我明日香川春雨零而瀧津湍音乎

いまゆきてきくものにもがあすかがはあめふりてたぎつせのとを

聞の字、末句ハたぎる瀬の音をといふ也

詠煙

春日野爾煙立所見嬬等四春野之菟芽子採而煮良思文

かすがのにけぶりたつみゆをとめらしはるのゝうはぎつみてにらしも

和名抄莪蒿於八木ハ俗によめがはぎといふ巻二にも出たり

煮らしといふ

野遊

春日野之淺茅之上爾念共遊今日忘目八方

かすがのゝあさぢがうへにおもふどちあそべるけふハわすらえめやも

[illegible]われハこれらんなき[illegible]の茅がうへにて[illegible]月日[illegible]

春霞立春日野乎往還吾者相見彌年之黄土

はるがすみたつかすがのをゆきかへりわれはあひみんいやとしのはに

あるくんハ友にあるくん人、黄土ハ借字、としのおなじ也、らくらくに

いふなり

春野爾意將述跡念共來之今日者不晩毛荒粳

はるののにこゝろやらんとおもひどちきたりしけふはくれずもあらぬか

謂こゝろやらんとハ述ハ力と遣とよみしが誤れるなるべし、ちから

集ちかまし、共ハ人をのぶくまじとよみ、ほこも人をのべあまたよめれど、

此あハさふそあらじ、あらぬかハあれうしと粳ハ糠の誤り

百礒城之大宮人者暇有也梅乎挿頭而此間集有

もゝしきのおほみやびとはいとまあれやうめをかざしてこゝにつどへる

もゝしきの枕詞、あれやハあれバや也、あれやとよむもあし

得ハ行ノ誤

歎舊

寒過暖來者年月者雖新有人者舊去

ふゆすぎてはるしきぬれバとしつきハあらたなれどもひとハふりゆく

四五あらたまれども、契沖がいへるごとく、有の字あまれバ

あらたなれどもとよむべし

物皆者新吉唯人者舊之應宜

ものみなハあらたしきよしたゞひとハふりぬるのみしよろしかるべし

大のあとせる二をまで人をたのしめるらん、尚書盤庚上曰、遲任有言人

惟求舊、器非求舊惟新、とみえるよかよかるなるべし

懽逢

住吉之里得之鹿齒春花乃益希見君相有香聞

すみのえのさとゆきしかばはるはなのいやめづらしきみにあへるかも

桜を得ハ紀の字のをちなるを誤れるへし、希見とめづらしとよむへし、よしは紀と
引くらへり

旋頭歌

春日在三笠乃山爾月母出奴可母佐紀山爾開有櫻之花乃可見

かすがなるみかさのやまにつきもいでぬかもさきやまにさけるさくらのはなのみゆべく

さきやまハ佐紀のあたりの山をいふ、佐紀山ハ添下郡

白雪之常敷冬者過去家良霜春霞田菜引野邊之鶯鳴焉

しらゆきのつねしくふゆはすぎにけらしもはるがすみたなびくのべのうぐひすなきぬ

うぐひすなくハ焉之鳥一本焉とあり

譬喩歌

吾屋前之毛桃之下爾月夜指下心吉菟楯頃者

わがやどのけもものしたにつきよさししたごころよしうたてこのごろ

桃の実に毛のあるをいふなるへし、毛桃といふての花咲る

桃の実のなる月の影のさしたるをいふ、こゝろよしとハ、わがしたごころ

よきをいふなるし、菟楯ハ借字にて心あるべし、

上の句ハ下にといはん為の序のみ、さて下心苦ハ志たこゝろやましとも又こゝろ

まどへるといふにて訓んといへり、桜の此頃志たくるべし、志たこゝろぐしとも

訓べく、おぼゆ、うたてハ集中にかくかく見え、古事記にもその外にもあまたの例あり

と猶其悪事不止而轉（うたて）よて、安康條、侍其大長谷王之御所人等白字多氏物

云王子（みこ）とよめり、それをうたてといふハまさしくハ考のしるしにみえたり

春相聞

春日野。犬鷗鳴別。眷益間。思御吾

かすがのゝともうぐひすなきわかれかへりますまもおもほせわれを

大ハ友の字の誤なるべし、此方のちがへハ脚痛といふ犬の下苗の字を脱せるか

ハあらじ、鶯の友なきへ鳴渡る附のめく泣つゝおくりて君が又かへりまつるも

恋と云れむつまじく思ひあへるへといふ也、眷ハかへりみるといふ事なれど、巻三

おもひのつゝみ家春奴とかけるを見れバかへるとよむべくなれバ借てかけるなるべし、

宝ちを犬ハ友の誤なるべし、かすがのゝともうぐひすのなきわかれといへり

冬隠。春開花。手折以。千遍限。恋渡鴨

ふゆごもりはるさくはなをたをりもちちたびのかぎりこひわたるかも

花のいくたびもあかずめでらるゝごとく恋しく思ふといふ也、冬ごもりハ枕詞

春山。霧惑在。鶯。我益。物念哉

はるやまのきりにまどへるうぐひすもわれにまさりてものおもはめや

ほゝ人霧に春にまよひつゝ鶯のなくよりハまさりて思ひ迷へるといふ也

孫咽霧山鶯嘯指サ

出見。向岡。本繁。開在花。不成不止

いでゝみるむかひのをかにもとしげくさきたるはなのならずはやまじ

むかひの岡ハむかひたる岡也、むつましくしげくさきたるはなのごとくやまじ

かなしと思ふまゝに我恋のなるまでハやまじ、されど花ハ桃の字の誤なるべし、巻十一やま

巻七にも毛桃本繁花のみさきてならざらめやも、とあり、

よの家原の毛桃本繁ソほして（ワギヘ／ムロフ）

と宝ちいつり、浜臣云在ハ毛の誤なりといへり

霞発。春永日。恋暮。夜深去。妹相鴨

かすみたつはるのながびをこひくらしよのふけゆきていもにあへるかも

春去。先三枝。幸命在。後相。莫恋吾妹

はるされバまづさきくさのさきくあらバのちもあはんなこひそわぎも

まづハさくのまくら詞さきくあるればはるされバ先さくといひくだしてさて
さきくさをさきくといはん序とせり、さきくさハ式に福草、和名抄に
葛 佐木久佐 とみえて、つ諸輯考にくはし、命あらバまた逢んといへり、宣長
うつ先ハ花の傍にて花までハさきくさの序といへり

春去為垂柳十緒妹心乗在鴨

はるされバしだりやなぎのとををにもいものこころにのりにけるかも

しだりハ二のかへのそかれ也、和名抄云楊一名小楊 之太里夜奈木 云
うしあり、とをしハたわゝと同じくしなひたるをいふ、末ハ巻二東人の若に
前のうつの乃とも妹情尓乗尓家留香聞、巻十一に又同じ、次第妹が
うの心にかゝれるといへり

右柿本朝臣人麻呂歌集出 右ハ七首人まろ歌集のうちなり

ここハ右の下七首の字脱たるこの

寄鳥

春之在者伯勞鳥之草具吉雖不所見吾者見将遣君之當婆

はるされバもずのくさぐきみえずともわれハみやらんきみがあたりハ

はるされバとほくもかすみて也、和名抄鳥名苑云鵙一名鶪、揚氏漢語云伯勞 毛受
とほく、そのぐきハ古説に草くぐりといへり、古事記集御刀之手上血自手股漏出 クキデ 訓漏云久伎 と有に同じく、くゝるハ股下のくゞと漏れ、ちくへハまでて
漏るとよくしと見ゆ、さるくハ其の也に正ぐの草のとくゞりても見えね
のあく、其の君がへてみて見えねども、我ハ今あてみえやりてあらんとなり

容鳥之間無数鳴春野之草根之繁恋毛為鴨

かほどりのまなくしばなくはるののくさねのしげきこひもするかも

巻三にも、かげろふのまれくしげるをそのなきてんことさかりひとさかりの
かたらひのしげくよめりハ、伴をよすも、ひのゝの筆にいりすまでハ志げき
といへる序之

寄花

春去者宇乃花具多思吾越之妹我垣間者荒来鴨

はるされバうのはなぐたしわがこえしいもがかきまハあれにけるかも

巻十九　宇乃花乎令腐(クタス)霖雨(ナガレ)のことよめり、うのはなをくたすとよめるハ、いふとまれ
あれど、皆ち従ふ、四月ごろより大やうにあめふりて、うちとなる、あまされバき
のこのくれあめにうち、四月ころといひて、三月までハうちので　本ハ志げくぞ、なる
志げるハ四五月ころといへるぞよき、或説に宇の下米の字を従へるのしといへれど、
垣字をばいへるも梅にハ従ひてくたねバ梅しもあるハむづかしも、くろし、八巻十
九にあるがごとく腐しむる事を略せてハそでては、しむる事もいふべし

かハ卯花垣を思越るとて、まなを苦しちらせしが、久しく通ひかねしてふ心
本の意にとるさまをかへてよめる也

梅花咲散苑爾吾将去君之使乎片待香花光

うめのはなさきちるそのにわれゆかんきみがつかひをかたまちがてら

巻十八田邉史福麻呂とくきて栽る、香の下花ハ衍文ならん、巻一に
多との清井を見我氐利(ガテリ)とて、片待ハなのごと待ちてがてりハ梅花をきし
見まのつかひを待んとしてあかねてよめる詞く

藤浪咲春野爾蔓葛下夜之戀者久雲在

ふぢなみのさけるはるのにはふくずのしたよのこひはひさしくもあらん

初句ハ藤都をいへん為のて、夜ハ借字にて、志たよしと訓て下従(ヨ)のことゝ、かのこ
夜ハ従(ユ)の語にそべし、下従ハ下待下心などいふ下のあし、之ハ助辞なり、
苗の下たえをいて下よりといへん序とせるなり、雲もろ久ハ之の語なく、

ことしくもあらんなるべしといへり、心は春の野に立てあらば逢べきの意としく

稀なりといふ意

春野爾霞棚引咲花之如是成二手爾不逢君可母

はるのゝにかすみたなびきさくはなのかくなるまでにあはぬきみかも

成は字のなるをいふ、さける花の不成は不止といふ成に同じ、心は[illegible]ち

花咲しころ逢しよりさくらの実になるまで逢はぬと歎く也

吾瀬子爾吾戀良久者奥山之馬醉花之今盛有

わがせこにわがこふらくはおくやまのあしびのはなのいまさかりなり

あしびは[illegible]、三四の句はさかりといはん為の句中の序也、盛は恋の甚きを云

梅花四垂柳爾折雜花爾供養者君爾相可毛

うめのはなしだりやなぎにをりまじへはなにまつらばきみにあはむかも

神に花をたむけて逢させ給へとねがふなり、之供養は[illegible]佛に

佛にといへり、さる事もあらん、或人花は神カミの誤とよめり、さもあるべし

姫部思咲野爾生白管自不知事以所言之吾背

をみなへしさきぬにおふるしらつゝじしらぬことにていはれしわがせ

咲野は咲野、初句は咲といはん為の枕詞、しらつゝじはしらぬといはん為のこと、

其花をみるべし、咲澤に生る花がつみといへり、契沖云[illegible]もあきらかや世

にいはれとのひて、わがせこをさへ[illegible]にあらん[illegible]あれとされ

るゝは、其わけと切らるべしといへり

梅花吾者不令落青丹吉平城之人来管見之根

うめのはなわれはちらさじあをによしならなるひとのきつゝみるがね

人の上在の字を脱せしか、又は之は在の誤のちなるべし、がねはかねてといふ意

がを濁るべきをあらはせて之ガの字を用ひたり、梅はたゞ梅をとなさば人よ

見きんとのみいふ枕にて[illegible]ゆゑに来つゝ見るがねとさらばあらじ、

ならん人の詠なるべきよしみえて、嬉を拾またゞ人てこそ人の言うまでうむ
まで八徒し人に逢はせじとりとむるべし

如是有者何如殖蕪山振乃止時喪哭戀良苦念者

かくしあればいかにうゑけんやまぶきのやむときもなくこふらくおもへば

山吹は集中妹に似るものとよみて、あるをうれば花も言ずに山吹にとらへて、
そゝ山ぶきを妹にたとへ、やまとの詞より、やむときはつゞけるにしたがふ、止時なき
こふるを恋のわざはらぶきをと作りよみてたゞえくんと悔るゝ

寄霜

春去者水草之上爾置霜之消乍毛我者戀度鴨

はるされば みくさのうへに おくしもの けつゝもわれは こひわたるかも

みくさは真草之水篶も真篶なるを、水の字を借れるがごとし、上は消を
いきん序のこと

寄霞

春霞山棚引欝妹乎相見後戀毳

はるがすみやまにたなびきおほゝしくいもをあひみてのちこひむかも

一二の句はおほしくといはん序にて、ほのかに妹をみて、後恋んとなり

春霞立爾之日從至今日吾戀不止本之繁家波

はるがすみたちにしひよりけふまでにわがこひやまずもとのしげゝれば

一云片念爾指天

本は本の本〻木の繁きをと恋の繁きにたとへたるにて、しげゝれバのれを
思ひるは、或本の作りよしてのもとよしとを

左丹頬經妹乎念登霞立春日毛晩爾戀度可母

さにづらふいもをおもふとかすみたつはるびもくれにこひわたるかも

さにづらふ、[illegible]、くれには宣長云齊明紀の歌に于之盧母俱例尼おきてかゆ

うんとまくれふ～のじくんのたれぬらすしといへり

靈寸春吾山之於爾立霞雖立雖座君之隨意

たまきはるわがやまのへにたつかすみたつともうともきみがまにまに

たまきはる枕詞、吾山は第十二廿七丁にいのちみなんわが山ちかゆる梅のよそにみつます

をとしよみて、吾須の莫なる山なと解釋せるにつか、寔ちは吾は妻の謂

なれとにて、此枕詞よりつゞけるを説考べし、雖座とうちしとよめるは、崇

神紀急居此云菟岐于と見えれば、よりゐるといへる事まく、立てゐるも君がまゝに

とりつゝも

見渡者春日之野邊爾立霞見巻之欲君之容儀香

みわたせばかすがののべにたつかすみみまくのほしききみがすがたか

かすがの霞のたなびくをみて思ひおこしむなく

急下毛今日者暮都霞立明日之春日乎如何將晩

こひつゝもけふはくらしつかすみたつあすのはるびをいかにくらさん

きのふもくるゝ

寄雨

吾背子爾戀而爲便莫春雨之零別不知出而来可聞

わがせこにこひてすべなみはるさめのふるわきしらずいでゝこしかも

こゝろはあふくおもひわびて、ふりしかるしるにふらねば、あめのふるにものを

まるのかよひてあるくがれこといへる背は妹の家の謂ならん、やまず

こひわたるべし、雅たのおよりるべし

今更君者伊不往春雨之情乎人之不知有名國

いまさらにきみはいゆかじはるさめのこゝろをひとのしらざらなくに

此は女のよみしてはこそ雅るるもで、寔ちら君は吾の謂え、さて是も女ゆるにも因

人のみぞこそこれはみ弁みて思ひ返してよめるちかるべし、春雨の降りまさるとても志あ

出てハ来つれども、ことよう見いらる事く、ふるべきをしられねバ、これより帰るべしといへど、其
ゆかしさに、人のいへるハ、春雨ハ人間のちかる処をきらわねバのことし、しらざるさく
ふハしらざる事也といへり。いかにのにハ変語

春雨爾衣甚将通哉七日四零者七夜不来哉

はるさめにころもハいたくとほらめや なぬかしふらバ なゝよこじとや

たゞハことはの意おなじ。春雨の降るを見るく、後もかハひし、するといひ、古注に
以上七ハ数のおほきを以て通じ、巻十一 あふみのうみ沖つ白浪しらねども妹がりといはゞ七日
といへるもおなじこゝろなんなる

梅花令散春雨多零客爾也君之廬入西留良武

うめのはなちらす はるさめ おほくふる たびにや きみが いほりせるらん

男の旅にしともをまつる白き事あまのおぼつかなく思ふる、梅を
多ハ痛の意にて、いたくふるを

寄草

國栖等之春菜将採司馬乃野之數君麻思比日

くずらがわかなつまんとしめののしば〳〵きみをおもふこのごろ

初句ハくずのこのかくしてよし。吉野の奥に住む里なり。神武紀
赤尾有て磐石を披て出る者あり。天皇問ひて汝ハ何人ぞ。對へて申さく
臣ハ是磐排別の子。此則吉野國樔部が始祖也とあり。應神紀にも
國樔人来朝して歌へる事見え、国名の聖（？）按に四冊しばのことあれバ、馬に
はのこゝろをしてしめのをとへバ、しめ野の地名なるべし。しバく
しでなれバ、しばのかしこきなりけれど、是に依、其の姿ハ見えず
其に依れバ、しめの野のしば〳〵といふべし。又しげしも集中しげしとよめる

とや。しらくのやハくさの事なるべし

春草之繁吾戀大海方往浪之千重積

はるくさの志げきわがこひおほうみのへによるなみのちへにつもりぬ

春草ハ志げきといはん為、さて恋のかくしりつゝを思ふ、往ハ依の字の誤なるべし

恋とてハ年のさかりをいへ

不明公乎相見而菅根乃長春日乎孤悲渡鴨

おぼつかなくきみをあひみてすがのねのながきはるびをこひわたるかも

菅根の枕詞、悲も本恋に作る一本に依て改つ

寄松

梅花咲而落去者吾妹乎将来香不来香跡吾待乃木曽

うめのはなさきてちりなばわぎもこをこむかこじかとわがまつのきぞ

梅をかざさんと待しを、其花も散なばわぎもが来まじきか、おぼつかな

なほてわが待んとるをまつにいひかけたり

寄雲

白檀弓今春山尓去雲之逝哉将別恋敷物乎

しらまゆみいまはるやまにゆくくものゆきやわかれんこひしきものを

志らまゆみより春といはん枕詞、はるくものといはん序にて、よハゆくといはん為別に

時くよぶるお恋の事也

贈蘰

丈夫之伏居嘆而造有四垂柳之蘰為吾妹

ますらをのふしゐなげきてつくりたるしだりやなぎのかづらせわぎも

ますらをとハ自らいへり、ふするかげにて八柳のうつり造りたるかづらをとて

伏ハ伏とも、居るとも起きて我思ふ妹を思ひなげくといふ也

悲別

せよとせしのことハ古言へ

朝戸出之君之儀乎曲不見而長春日乎恋八九良三

あさとでのきみがすがたをよくみずてながきはるひをこひやくらさん

曲ハ委曲の儀とりてくハしくといふ心也、歌ハ朝戸出の君をよくも見ずして長き春日をこひくらさむと也

問答

右の二首ハ問答にあらざれども更にてハ此歌叶はずして次での乱るゝの

春山之馬醉花之不惡公爾波思恵也所因友好

はるやまのあしびのはなのあしからぬきみにはしゑやよせぬともよし

あしびハきよらに咲ける花なれバたとへ、しゑやハ歎息の声也、よせぬともよしハたとひ

人の言伝せりひさわぐともよしと也、女の答也

石上振乃神杉神佐備而吾八更更戀爾相爾家留

いそのかみふるのかみすぎかんさびてわれやさらさらこひにあひける

いそのかみとハ袖留あらで大和国山辺郡の石上の神宮也、古事記に天神

高倉下(タカクラジ)に夢のうちに剣を降し賜ふ條に建御雷神の曰有平其国之横(ソノクニヲ……)

刀可降是刀(アリシノタチヲクダスベシト) 此刀名云佐士布都神、亦名云甕布都神、亦名布都魂、此刀者坐石上神宮也 紀にハ韴霊とあり石上の神

宮に此剣の坐す故なるべし、布都とハ此剣を諸の悪しきを断つことにて布留と同じ神名

也さハ石上坐布留御魂と云ふ神さびハこゝにてハ年ふるの意なりとして、かく歌に言

ふ意なりと心得べし、巻十一石の上振の神杉神成(ビヲ)恋をもわれハ又もふるかもとある、同じ例なるこのうた

太二そ同義ことなり

右一首不有春歌而猶以和故載於茲次

狭野方波實爾雖不成花耳開而所見社戀之名草爾

さぬかたはみにならずともはなのみもさきてみえこそこひのなぐさに

此歌ハ花にて待人の言にたとへたる也

此下に沙額田乃野邊のあきはぎとよめれバ、これも地の名にて、此の

梅桃などまでいへる、巻十三にてまさぬかたとよめるハ近江国名の地を

のこはいへる、宮に来りにハよに高樹の村なるうら、三笠の山ハ咲る

けることも又梅の花を川のながれバ見えるなるうちもなどいへるがみしらバ

たとひ言になくむとして、うつべ中へとし、お思ふにまかせんとやといへり

狹野方波實爾成西手今更春雨零而花將咲八方

さぬのかたはみになりにしをいまさらにはるさめふりてはなさかめやも

右の歌は...

梓弓引津野邊有莫告藻之花咲及二不會君毳

あづさゆみひきつのべなるなのりその花さくまでにあはぬきみかも

巻七旋頭歌に梓弓引津のべなるなのりその花つむまでにあはざらめやもなのりその花

その花いづれの...巻十五詠引津亭作歌とある...筑前之名の

また...のさける...

川上之伊都藻之花之何時何時来座吾背子時自異目八方

かはかみのいつものはなのいつもいつもきませわがせこときじけめやも

巻四にいつもの花詳なり

春雨之不止零零吾戀人之目尚矣不令相見

はるさめのやまずふりふりわがこふるひとのめすらをあひみせざらん

零作とあるを零々と見誤りてかく零零とはかきしなるべしと宣長云り

雨の降ることをこひしきにたとへるか

吾妹子爾戀作居者春雨之彼毛知如不止零作

わぎもこにこひつゝをればはるさめのかれもしるごとやまずふりつゝ

彼はあめをさしていふ妹に恋て泣涙と雨も知るがごとくふるといふ

相不念妹哉本名菅根之長春日乎念晩牟

あひおもはぬいもをやもとなすがのねのながきはるひをおもひくらさん

以下云々...

春去者。先鳴鳥乃。鶯之。事先立之。君乎之将待

ちるされば、まづなくとりの、うぐひすの、ことさきだちし、きみをしまたん

まちるの中に、ちるハことさきだちて来鳴けバ、ことさきだちといへる序とせり、

んハまむ約しまつと約らんとなりつゝ、きて言出しハ、たゞのことによするか小

山田のなりしろかの中に、おもひて、神代紀如何婦人反先言乎

相不念。将有見故。玉緒。長春日乎。念晩久

あひおもはず、あるらんこゆゑ、たまのをの、ながきはるひを、おもひくらさく

ちるまでごし、こゆゑハ子ゆゑなるんのこえ、むのをの語、くらさくハくらし

ちくと延ぶく

夏雑歌

詠鳥

丈夫丹。出立向。故郷之。神名備山爾。明来者

ますらをが、いでたちむかふ、ふるさとの、かみなびやまに、あけくれば

柘之左枝爾。暮去者。小松之若末爾。里人之。聞戀麻田。

つみのさえだに、ゆふされば、こまつがうれに、さとびとの、ききこふるまで

山彦乃。荅響萬田。霍公鳥。都麻戀為良思。左夜中

やまびこの、こたへするまで、ほととぎす、つまごひすらし、さよなかの

爾鳴

になく

集一に丈夫のさつ矢手挿立向、集廿あらしをのいはさむひ立ち

とい、ますらをハ的に向ひ、出立むかふ、のそのむかへハ出向ひ、のて向へてむ、又ハ

ふるさとハふるくなりて大君の古の府楯と出立し、ちのぞみと思ひ

この丈夫丹ことしりて、ますらをたちむかふ勢をおもひてよめる

と篇ハいまれき、或人ハ丈夫丹ハ走出丹の誤なるべしといへり

ゆき文夫丹ハ誤字にて丈夫と考べし、さて出る向ハあちらを出るとて
白つる神なびの字かれバりつゝ、故にハ前書のおもへ、つみハ葉の数まで
此らむ、宇立つるハほとゝぎすをとをく立ちつゝまん

反歌

客爾為而妻戀為良思霍公鳥神名備山爾左夜深而鳴

たびにしてつまごひすらしほとゝぎすかみなびやまにさよふけてなく

古今集にも、なれきるなきにまづ旅なるほとゝぎすとよめり、旅人のなく
てこゝなるかのそへてよめり

右古歌集中出

霍公鳥汝始音者於吾欲得五月之珠爾交而将貫

ほとゝぎすながはつこゑはわれにもがさつきのたまにまじへてぬかん

ほとゝぎす汝の初声をとめおきせんよしもがな、菖蒲に交へぬかんとなり

朝霞棚引野邊足檜木乃山霍公鳥何時来将鳴

あさがすみたなびくのべにあしびきのやまほとゝぎすいつかきなかん

たなびく野辺とはかゝる時をよめるなり

旦霞八重山越而喚孤鳥吟八汝来屋戸母不有九二

あさがすみやへやまこえてよぶこどりなくやながくるやどもあらなくに

新考にハやへ山こえて[illegible]八重山地名なるべし、孤ハ
呼子とやかもなくしてましやと、よぶこ鳥を喚むさまなり、
呼子とよぶの語なるを、呼子ハ声の高きを説てこゝに入るの

霍公鳥鳴音聞哉宇能花乃開落岳爾田草引嬬嬬

ほとゝぎすなくこゑきくやうのはなのさきちるをかにくずひくをとめ

源康定主の説、草ハ葛の誤にてよまへ、[illegible]くずと田葛とあり、
さてくずひく女とはうたてとよさまく

月夜吉鳴霍公鳥欲見吾草取有見人毛欲得

つくよよみなくほとゝぎすみまくほりわがくさとれるみん人もがも　しかも

これはほとゝぎすをまつとて庭草を掃きてまてれど猶なかねば、宝ちかきハ今の俗にいまくさとれるか、草とるハなくてなかみ
木の枝などにうつり居るなり、又うかハほとゝぎす也の月を見んとほつて、
今本の枝になりと、まて見ん人もがなとも、本千九ほとゝぎすてきなきと
よなばそのとしん花橘をやどまからてて　とあるも、ほとゝぎすのまてこ
まるべき橘とうゑんといへり、この木の事も未何謂なるべし猶そこ
ふみそえん

藤浪之散巻惜霍公鳥今城岳叫鳴而越奈利

ふぢなみのちらまくをしみほとゝぎすいまきのをかをなきてこゆなり

今城の大和高市郡に、ほとゝぎすをゝ来なくなりけるを

且霧八重山越而霍公鳥宇能花邊柄鳴越来

あさぎりのやへやまこえてほとゝぎすうのはなべからなきてこえきぬ

朝ぎりのもよの朝ぎりのやへといへる枕詞也、且ハ霧ハ霞の誤
の誤なるべし、うの花べからハうの花の辺より方よりといふ也

木高者曾木不殖霍公鳥来鳴令響而戀令益

こだかくはかつてきうゑじほとゝぎすきなきとよめてこひまさらしむ

とよめてハとよませてを約言

難相君尓逢有夜霍公鳥他時従者今社鳴目

あひがたききみにあへるよほとゝぎすあだしときよりハいまこそなかめ

こよひ何事あらんよりハいのりく縁あるきあけのしらく

木晩之暮闇有尓 一云有者 霍公鳥何處乎家登鳴渡良哉

このくれのゆふやみなるにほとゝぎすいづくをいへとなきわたるらん

このくれハ木のしたやみとよむ。哉ハ武の誤也。一本の旬者もかつこれと同じ

ことなる古意の例也

霍公鳥今朝之且明尓鳴都流波君将聞可朝宿疑将寐

ほとゝぎすけさのあさけになきつるハきみきくらんかあさいかねぬらん

朝けハ朝明也。君ハちぎりけんか。こひしくハ朝いしてきかざらしものを也

疑ハうたがひとも歟の意に用ひたり

霍公鳥花橘之枝尓居而鳴響者花波散乍

ほとゝぎすはなたちばなのえだにゐてなきとよもせばはなはちりつゝ

慨哉四去霍公鳥今社者音之干蟹来喧響目

うれたきや。しこほとゝぎすいまこそハこゑのかるゝにきなきとよまめ

神武紀慨哉此云于黎多棄加夜。一二の句ハ能ものゝふを罵りていふ也

志こハ。志このしこ草なと同じく、醜ハ志こ也。字鏡多伎也志

許霍公鳥鳴のこゑがきこゆるおもひしくよみなさて此の句よみハ云

なにまでのこゑのほかをきくべきこゑなきをといへる、かゝるうたハ辞のか

そばのわ也

今夜乃於保束無荷霍公鳥喧奈流聲之音乃遥左

このよらのおぼつかなきにほとゝぎすなくなるこゑのおとのはるけさ

おぼつかなきハおぼろなる詞也。めをとみてよむ也

五月山宇能花月夜霍公鳥雖聞不飽又鳴鴨

さつきやまうのはなづくよほとゝぎすきけどもあかずまたなかぬかも

さつき山ハ名にあらず。五月のころの山くらの事也。花ハ卯の花のさかり

なるハ月夜のかくれなきといふ。なさけあるとよめり。詞もハ語る

る詞なり。鳴くなべきをおもふさかるハ名案中物なし

霍公鳥来居裳鳴香五百屋前乃花橘乃地二落六見牟

ほとゝぎすきゐてもなかなくこのわがやどのはなたちばなのつちにおちんみん
なくこのハ鳴かなもの略、宣長云、六兄年ハ右左手の誤にて、おつるまでと訓べし
といひかさねてハよく聞えず、おちんといふべけれど

霍公鳥厭時無菖蒲蘰将為日従此鳴度禮
ほとゝぎすいとふときなしあやめぐさかづらにせんひこゆなきわたれ
いつとてもいとふ事ハなけれど、殊に五月五日のせちにはなきわたれかしとよめり、菖蒲のかづらハ續紀天平十九年五月太上天皇詔ありけるハ五日節菖蒲かづらとせり、比来已にやむ、今より後菖蒲縵あらずして宮中に入ることなかれと有、巻十八に田邊史福麻呂が哥にもよめり

山跡庭啼而香将来霍公鳥汝鳴毎無人所念
やまとにはなきてかくらんほとゝぎすながなくごとになきひとおもほゆ
人をしたひてはよめるなるべし、或ハ振人ての書の大伴郎女みまかりし

時ならぬ時に鳴のみのほとゝぎすなりとよめる也、卯の花の散なべにはやくしらば
ハよしとのとよみあるもたまきに人をよまれしやといひてよく、ちるよしも
ほとゝぎすなきてさぞるよしいひたるハ、せしりとなん

宇能花乃散巻惜霍公鳥野出山入来鳴令動
うのはなのちらまくをしみほとゝぎすのにでやまにいりきなきとよもす
ほとゝぎすのうの花をとうしむさまのほとよめり

橘之林乎殖霍公鳥常爾冬及住度金
たちばなのはやしをうゑむほとゝぎすつねにふゆまですみわたるがね
きのほとゝぎすとかへるをまつゆゑにわがやどの此橘を植てよとなり
ともよめり、がねハ後をかねていふ詞

雨霽之雲爾副而霍公鳥指春日而従此鳴度
あめはれのくもにたぐひてほとゝぎすかすがをさしてこゆなきわたる

而後云く、此も白山の方へ帰る所を見て、ほとゝぎすの鳴行しとよめり、
霽を今本嚌とあれど、字なきによりて、一本に依て改

物念登不宿旦開爾霍公鳥鳴而左度為便無左右二
ものもふといねぬあさけにほとゝぎすなきてさわたるすべなきまでに
ものおもひにいねざりし夜の明まくさわたるのさは發語なり、鳴渡る也

吾衣於君令服與登霍公鳥吾乎領袖爾来居管
わのころもきみにきらせよとほとゝぎすわれをうながすそでにきゐつゝ
我衣に、これをきせてと八重をつけてんとて、これは卒にかゝりきせ
る衣なるをいふにや、さるまゝにては、きせよと云てまくて、いふべきを
いふにや、翁は、乎ハ千の誤にて、領ハ衣一領などいふべきなりと訓べければ
このかなきぬの手になるべし、此にかけりしてきぬの袖にまねて鳴
といふにや、袂といへれば、かゝる四の句語をなすべし、猶考ふべし

本人霍公鳥乎八希将見今哉汝来戀作居者
もとつひとほとゝぎすをやめづらしくいまやながこしこひつゝをれば
ほとゝぎすをさしてもとつ人といへり、集中遠つ人雁がきなかんといふのたぐひ
遠つ人は雁をいへるにひとし、をやはよやのこゝろと言もかへり帰りくる詞也

如是許雨之零爾霍公鳥宇之花山爾猶香将鳴
かくばかりあめのふらくにほとゝぎすうのはなやまになほかなくらん
ふらくハふるを延ていふ、卯の花山は卯花のあまたさきて、卯の花の咲たる山を
いふ、かく雨のふるをもいとはず猶ほとゝぎすは鳴やらんといふ也

詠蟬

黙然毛将有時母鳴奈武日晩乃物念時爾鳴管本名
もだもあらんときもなかなむひぐらしのものもふときになきつゝもとな
和名抄云、爾雅云、茅蜩一名蠽（比久良之）小青蟬也とあり、ひぐらしあらんハたゞ

輿ハ乞ノ誤

しあんと云有じ

詠榛

思子之衣将摺尓尓保比与嶋之榛原秋不立友

おもふこがころもすらむににほひこそしまのはりはらあきたゝずとも

衣をするに似せよかし、にほひこそハにほへかしと也、島ハ高市郡の地

名、榛ハ萩也、萩にてすりて、とらむるハ、萩の花を、此ハ木の皮ハ剝ちるやう

詠花

風散花橘叫袖受而為君御跡思鶴鴨

かぜにちるはなたちばなをそでにうけてきみがみあとゝおもひつるかも

妻沖云橘のちるをしたふくるハ為萬葉ニ衣裳とらするほどハ入たる

ごとくいつか、君か為跡とおもひつんとあやまりて君の上ハ為の字

ぬ入しなるべし

香細寸花橘乎玉貫将送妹者三禮而毛有香

かぐはしきはなたちばなをたまにぬきおくらんいもはみつれてもあるか

くはしハちぶくほか有老仁三礼二見律れ作らひとむしよりハ紀ニ瓢とみ

れと訓ハ、すハ所送といふも、将送といへるハ病てつかれ居る時ゆゑ也ハ略

さるすか欲とふかるべし

霍公鳥来鳴響橘之花散庭乎将見人八孰

ほとゝぎすきなきとよますたちばなのはなちるにはをみんひとやたれ

橘の花ちる庭と、ここにハまてとくとききくんなれとよつて

吾屋前之花橘者落尓家里悔時尓相在君鴨

わがやどのはなたちばなはちりにけりくやしきときにあへるきみかも

橘も落るこれハ、ぶちを結ひしうひもなくて、くやしきにあてはめて

つるなるべし

行ハ所ノ誤

見渡者向野邊乃石竹之落巻惜毛雨莫零行年

みわたせばむかひのゝべのなでしこのちらまくをしもあめなふりそね

うちむかふ所のなでしこ、行ハ所の誤也

雨間開而國見毛将為乎故郷之花橘者散家牟可聞

あまあけてくにみもせんをふるさとのはなたちばなはちりにけむかも

あまあけてハ雨の晴間也。國見ハ橘などの咲かる所を見めぐりて、國見せん時、橘もちりて、興なからんと云る。雨降つゞきて、國見もせで、なにの橘もいたづらになりぬらんと思ふ也。此歌にてハ、蔭蔭の蔭るの古事をいふべし

與ハ乞ノ誤

野邊見者瞿麥之花咲家里吾待秋者近就良思母

のべみればなでしこのはなさきにけりわがまつあきはちかづくらしも

吾妹子爾相市乃花波落不過今咲有如有與奴香聞

わぎもこにあふちのはなはちりすぎずいまさけるごとありこせぬかも

色々の種物の棟を植ふあつまりひらけていつもちらぬやうにしてぞ咲るをめでたく
あれかしとねがふ也

春日野之藤者散去而何物鴨御狩人之折而将插頭

かすがのゝふぢはちりにてなにをかもみかりのひとのをりてかざゝん

おりてハ古いふての意

不時玉乎曽連有宇能花乃五月乎待者可久有

ときならずたまをぞぬけるうのはなのさつきをまたばひさしかるべし

上句一二三と次第してよむべし。時ならで卯の花を玉とぬけるといふ也。さて
菖蒲をぬくべき五月よりさきに卯の花を玉とぬけるよしなれば、時ならぬといふ也。
五月の薬玉ハ橘の実・桂の物などをたなほりて、結束ぬるをもて玉ぬくといへり

問答

宇能花乃咲落岳從霍公鳥鳴而沙渡公者聞津八

沾ヲ今沽ニ誤

うのはなのさきちるをかゆほとゝぎすなきてさわたるきみはきゝつや

聞津八跡君之問世流霍公鳥小竹野爾所沾而從此鳴綿類

さわたるのさは發語なり

きゝつやときみがとはせるほとゝぎすしぬのにぬれてこゆなきわたる

此歌は鏡王女之歌にて、ぬれてとよめり、五月雨にぬれて鳴わたるさまをいへり、沾を沽に誤れり、又磨本によりて改

譬喩歌

橘花落里爾通名者山霍公鳥將令響鴨

たちばなのちるさとにかよひなばやまほとゝぎすとよもさむかも

橘は娘子にたとへ、ほとゝぎすは人にいひさわがれんといへるなり

夏相聞

寄鳥

春之在者酢輕成野之霍公鳥保等穗跡妹爾不相来爾家里

はるさればすがるなすのゝほとゝぎすほとほといもにあはずきにけり

和名抄虫豸類注云、蠮螉佐曾里、似蜂而細腰者也、兼名苑云、一名蜾蠃さゝら、雄略紀に蜾蠃といへる人名あり、これをすがるとよめり、佐伯蜾蠃ジガバチといふ

すがるは野に住て、すがるなすのとつゞけたるなるべし、ほとゝぎすの、また草を借てすまふなれば、かのすがるのごとくといふこゝろ

もあるの事を借て、すがるなすのゝとつゞけたるなるべし、ほとゝぎすの

をなるとつゞけたるなるべし、さて集中すべてほとゝぎすをよめる

歌は、ほとゝぎすの声をきゝて妹を思ひなどよめるが、また、妹に逢ずしてほとほと

あはずきにけりとよめるにや、されど二の句穩ならず、誤字

あらんか

五月山。花橘爾。霍公鳥。隱合時爾。逢有公鴨

さつきやまはなたちばなにほとゝぎすかくろふときにあへるきみかも

五月の橘にほとゝぎすのやどりをる時鳥もみえずあへるをよろこぶ、

かくろふハかくるゝを延言

霍公鳥。來鳴五月之。短夜毛。獨宿者。明不得毛

ほとゝぎすきなくさつきのみじかよもひとりしぬればあかしかねつも

寄蟬

日倉足者。時常雖鳴。我戀。手弱女我者。不定哭

ひぐらしはときとなけども、わがこふるたわやめわれはさだまらずなく

上の我元暦本に花て一本物と有、一本によらバそのこゝろと有べし

定もハ紛ハ君の住くとしてか、むぐらしよりむ、ひぐらしハ夜と時とを分けども

我ハ時とけぢめなく、不定ハ定まらずなく時わかずなげかるゝ

このたをやめされバ、丈夫我ハ又世の人されハちからよわきひと

女のみづからいふ

寄草

人言者。夏野乃草之。繁友。妹與吾。携宿者

ひとごとはなつのゝくさのしげくともいもとわれとしたづさはりねば

そのかくといふを思き、携ハりねバよろしとりあへず、元暦本吾の下

師のらます

延者之。戀乃繁久。夏草乃。苅掃友。生布如

このごろのこひのしげくなつくさのかりはらへどもおひしくがごと

巻十一、わがせこをわがこふらくハなつくさのかりそくれども生ひしくがごとし

うた同じ、おひしくハ生ひ重なるかく、及ぶなり

真田葛延。夏野之繁。如是戀者。信吾命。常有目八方

頰合ヲ頰令ニ誤

まくずはふなつののしげくかくこひばまことわがいのちつねならめやも

夏の野のしげくといふを思ふらハ、こふるハまことに我命のあやうきことあらんや、絶しせらくしいふ也、元暦本方を面と作る

吾耳哉如是戀為良武垣津旗丹頰合妹者如何将有

われのみやかくこひすらんかきつはたにつらふいもはいかにあるらむ

頰合をとゝ本頰令ヿ誤也、元暦本并古本ニ依テ改、集十一ニ垣幡丹頰經君

叩ゝとあり、にづらふハ、につらふとよむべし、かきつばた枕詞

寄花

片搓爾絲叫曾吾搓吾背兒之花橘乎将貫跡母日手

かたよりにいとをぞわがよるわがせこがはなたちばなをぬかんともひて

かたよりハ片思ふるたとふ、橘の実を貫ハ花ちるを、実花ちれバこれハ

花をいへり、ぬかんと思ひてハ、其実成んとねがふなり

鸎之徃来垣根乃宇能花之猒事有哉君之不来座

うぐひすのかよふかきねのうのはなのうきことあれやきみがきまさぬ

鸎ハ来れども君ハ来まさぬといふかあれバなり、又の本ぬとく、卯

の花ハうのをとりいひかへるなり、末ハうしと詠る古きものへの

うの花のこゝで全同じ言有

宇乃花之開登波無二有人爾戀也将渡獨念爾指天

うのはなのさくとはなしにあるひとにこひやわたらんかたもひにして

上句ハつれなくてある人にたとへるべし、卯の花のさかぬをいふハ、あらぬを

さくとなまでくかれる詞ゝ、其花よするの如き実の種なし、也おぼしくぞ

ゐりなるべくて知べし

吾社葉憎毛有目吾屋前之花橘乎見爾波不来鳥屋

われこそはにくくもあらめわがやどのはなたちばなをみにはこじとや

秋とはいふあれども、ほとゝぎすをきくまではまたでとやといふ、女のうた

霍公鳥来鳴動岡部有藤浪見者君者不来登夜

ほとゝぎすきなきとよもすをかべなるふぢなみみにはきみはこじとや

こは、たゞ時をまち、われしづかにまちて藤とはいへど、君ハこゝに

まちどとやといふ

隠耳戀者苦瞿麥之花爾開出與朝且将見

こもりのみこふればくるしなでしこのはなにさきでよあさなさなみむ

こもりのこふは思ひのまゝ、花にさけよはあらはしてみむといふなり

こはたゞ時ふることのとりてよめる也

外耳見筒戀牟紅乃末採花乃色不出友

よそのみにみつゝこひなむくれなゐのすゑつむはなのいろにいでずとも

筒をと箇にかれ、すゑつむはくれなゐの花のすゑをつみとれバ末のいふ、そて

色にはいでずとも、そのすゑつむ花の色のやうにこひしまむといふ、末ハ集中

くれなゐのよあれバ、字ハうつしつむ花によまんといふ

寄露

夏草乃露別衣不著爾我衣手乃干時毛名寸

なつくさのつゆわけごろもきせなくにわがころもでのひるときもなき

夏草の露をわけぬる衣をきせもせぬに、わがころもでのかわくときもなきといへり、たゞ

なげきのなみだにぬれて盡セルよしなり

寄日

六月之地副割而照日爾毛吾袖将乾哉於君不相四手

みなづきのつちさへさけててるひにもわがそでひめやきみにあはずして

月の名のうへハ考の別記にあり

秋雜歌

知ハ弥ノ誤
火ハ哭ノ誤

七夕（ナヌカノヨヒ）

天漢水左閉而照舟竟舟人妹等所見寸哉

あまのがはみづさへにてるふなわたりふねこぐひとにいもとみえきや

右本水の下底の字あり、しかれば二三四の句、こなたにてみえてるふねのさそく
かゝるひかり河べし水底まで照てるばかりひかる舟といふべし、舟人
はやがて牽牛なり、いもは織女をいへり、こなたよりはおほみえなかりしと云へる

久方之天漢原丹奴延鳥之裏歎座津之諸手丹

ひさかたのあまのかはらにぬえどりのうらなけましつゝともしきまでに

本ノ一ト歎居若（ウラナケヲレバ）、本ニ十七字良奈氣之都追（ウラナケシツヽ）とありて、乏しきまでには、
かゝるこひはたゞひとりめづらしきまでなりとなり、諸手は眞手、或は
左右とかけるに同じ義也

吾戀嬬者知遠往船乃過而應来哉事毛告火

わがこふるつまはしれるをゆくふねのすぎてくべしやこともつげなく

知ハ本弥に作るぞよき、つまをやあふくと訓べし、火は哭の誤なるべし、いぬふと
なりしは倭にて嬬は借りたるにて、義見とさて、義見は舟こぎすぐべく言をとも
のなりせず、遠くたゞよるとおなじちぎりけるし、[illegible]
りつるなり

朱羅引色妙子數見者人妻故吾可戀奴

あからひくしきたへのこをしばみればひとづまゆゑにわれこひぬべし

あからひく枕詞、しきたへの子は射にせるは、あかねさしてらすひのいもなどこゝ
はおもひしくは、あからひく子とかよはくおもをいつくしみてしきたへとはいふ
にや、俗字なり、數（シキタヘ）細布のきぬ、數は物の繁くうるはしきをいひ、細布も
よき絹布をいふ語なり、女のうつくしく和（ニギ）やかなるをほめたる語なり
と翁いはれき、射辞考にまし、しかぞあれば、しばしばみれば、人妻なれ

こゝハ年一度のあへる妹をさへあるが人嬬故にとよめるにや又
おなじく人の妻なるをのぞいへるにて此哥七夕の哥ときこえず誤て
こゝに入しなるべし

天漢安渡丹船浮而秋立待等妹告與具

あまのがはやすのわたりにふねうけてあきたつまつといもにつげこそ

やすの渡ハ天の河の一名也神代紀八十万神會合於天安河邊とも
見え実ちかき秋ハ我の後也わがたちまつとくといへるぞよみきハ白具ハ在其の誤
なるべし告こそハ告よかしとねがふ詞也巻十三真福在白具ともあるも
在其の誤なるを中古なれバたがふに誤れる也

従蒼天往来吾等須良汝故天漢道名積而叙来

おほぞらゆかよふわれすらながゆゑにあまのかはぢをなづみてぞこし

是ハ彦星にかはりてよめる也なハ織女をさす

八千戈神自御世乏孋人知爾来告思者

やちほこのかみのみよよりともしづまひとしりにけりつぎてしおもへば

八千戈神ハ大巳貴命にて三輪の大神也巻六八千桙の神の御世よりとも
見えてともしづまハたまさかに逢てつれなき妻を告ハ借字にて
継なり巻三語告言継将往と見えたりつぎてしおもへバ也継しは
とよめり孋ハ文選左太沖詩に伉儷不安宅張銑が注に伉儷謂妻也とある
儷孋同歟にてたゞ通じ用ひしならんと宣長いへり

吾等恋丹穂面今夕毋可天漢原石枕巻

わがこふるにのほのおもわこよひもかあまのかはらにいそまくらまかむ

彦星をながめてよめる也にのほもハ巻十九御面謂之美於毛和と
自注ありにほ面ハいそまくらハ別石之

己孋乏子等者竟津荒礒巻而寐君待難

余ハ乞ノ誤

志がつまのとかしきこころハ、たちてみつゐてもそまちてねんきみまちがてふ

一二の句ハ織女をさして、意津あるそひつよ訓たれど、こちし、竟ハ立見二字の一字のこる例あって、天の河原に立ぬ日ハちるしといふべきるべしとよめいそれき、字もちろ、竟津ハはつるつのと訓べし、さて一二の句ハおのがつまのこころしむらつハとよみての句おかろまきそぬと訓べしといへり、猶考べし

天地等別之時従自孋然叙手而在金待吾者

あめつちとわかれしときゆ、おのがつまじかてぞあきまつわれハ

此の句語でなあしん解がたし、真淵ハ志ろぞ一字あるハ天地のわかれしより、織女ハおのがつまと定くあることかぞくなるまでといへり、猶考べし

彦星嘆須孋事谷毛告余叙来鶴見者苦彌

ひこぼしのなげかふつまにことだにもつげにぞきつるみればくるしみ

元暦本彦を孫に作る、ひこぼしの歎きをみるもくるし、これハ他人の言なるを

与ハ乞ノ誤

告にありしとく、余ハ乞の誤

久方天印等水無川隔而置之神世之恨

ひさかたのあまつしるしとみなしがははへだててきしかみよしうらめし

此末も、天験と定てしとなり、そをみなせがはと訓たれど、元暦本みなしがはとあるをよしとすべし、別天漢のさまや

黒玉宵霧隠遠鞆妹傳速告與

ぬばたまのよぎりがくりてとほくともいもがつてはやくつげてせ

妹がつてハ織女よりの言をつてすべき、ことを告よしとなり、与ハ乞の誤

汝戀妹命者飽足爾袖振所見都及雲隠

なが恋ふるいものみことはあきたりにそでふるみえつくもがくるまで

あきたりハあくまでのことく

水ヲ志ノ假字ニ用タルハ拗音ヲ直音ニ轉タル也

夕星毛往来天道及何時鹿仰而将待月人壮

ゆふづゝもかよふあまぢをいつまでかあふぎてまたんつきひとをとこ

考ニ夕づゝのゆきかくゆきかくといふ和名抄長庚由不豆々月人をとこハ

此下みえて、言葉をいへり、此の下ノ子を脱せるか、下ノ例ノ如し

天漢已向立而戀等爾事谷将告嬬言及者

あまのがはこむかひたちてこふらくにことだにつげんつまといふまでは

こむかひのこハ此方の略、考十八ニ安の川許牟可比太知弖（コムカヒタチテ）とあり

等ハ示を誤れるなるべし、これハ牽牛のいまだ織女をわたらずして

戀ふるさまをよみてしるべし、つまといふまでにハ、まだかの妻といふ

あでむの言ハ、考え字奇なる仮名、私語字なるべしこの

水良玉五百都集乎解毛不見吾者干可太奴相日待爾

しらたまのいほつつどひをときもみずわれはほしかぬあはんひまつに

巻十八思良多麻能伊保都々度比乎（シラタマノイホツツドヒヲ）てにむすびおこせむ古へ人の玉のその

事を偲ぶれば、織女も常にもつけたるなるべし、下ニ五百つどひハ玉の數多

きをいへり、ぐるぬハ洞をとりてきくがにあハ不勝（カテヌ）といふに同じ、又彼よ

みにするなどいひて干といへるもいかで、干ハ在の誤なるべく、わかつゞみの

天漢水陰草金風靡見者時来之

あまのがはみづかげぐさのあきかぜになびくをみればときはきぬらし

巻十二山河水陰生山草（ヤマカハノミヅカゲニオフルヤマスゲノ）とも、此陰を一本に隠とあるもさる事なるべし、陰

ハ隠の字の誤れバ、みかくれの洲の水分とみくまりとも、みくまり

とも洲のくまに生るをいふなるを、ことわりかげなきいひてかたき

ふいつるハひがことにて林風よりなびくといふ太考十二にあるハ、

ありたげの洲べなれバ、かくよめるなるべし、猶いはれなきされど此

巻なる陰草とよめるハ此の誤なるべし、このみれバ水陰なるべく生る字を水陰なるべし

ほそく楽汁がいづるによるべし、来の下良の字を脱せるかいたで牧風
に天の川べのさすれ飄くをもくく二星お逢時まうでらんといつてのこ
吾等待之白芽子開奴今谷毛爾寳比爾徃奈越方人通
わがまちしあきはぎさきぬいまだにもにほひにゆかなをちかたびとに
宝ちは秋はぎさきぬ八まくべき時なるされることを、とぐにて八月日久しく
ゐでもりてせあて今なるとして此下の句の今だにもと同じといへり、
みあひにゆかれといふ彦星に艶の字をそふひとゝ訓しんやうく、後の詞
まてにゆかなでもあきにゆかんといふことなるらん、越方人は織女をさすべし、
白は西方秋の色なれば義をもてかり
吾世子爾裏戀居者天河夜船榜動梶音所聞
わがせこにうらこひをればあまのがはよふねこぐなるかぢのおときこゆ
わがせこは彦星をさせり、うらこひは心の中に恋ふるなり

真氣長戀心自白風妹音所聴紐解徃名
まけながくこふるこころゆあきかぜにいもがおときこゆひもときゆかな
まけながくは長の字をそへたるなり、彦星のこふる心の、秋風の便に妹がの
音にせしこゆるにゆかんとも、宝ちは待の語をてまうきたるといふ
戀敷者氣長物乎今谷乏之牟可哉可相夜谷
こひしくはけながきものをいまだにもともしむべしやあふべきよだに
此歌ではこふるはけながきものをともしむべしやあふべき
そのをとこて載るかいづれの方ならん、ともしくては年中こひしくのとし
よみくしくは[illegible]、[illegible]とらるべし、ともしむべしやは[illegible]
く表[illegible]かなすつてさじらんやのことく
天漢去歳渡伐遷閇者河瀬於蹈夜深去来
あまのがはこぞのわたりばうつろへばかはせをふむによぞふけにける

わかるゝのゝハ場のさま故ハなむかのふのこゝろをまうけたるを後とし
渡の意なれバ河渡をふみ試るほどなき事の文なるべし

自古挙而之服不顧天河津爾年序経去来

いにしへゆあげしはたをかへりみずあまのかはづにとしぞへにける

服とかけれどこハたちあぐる衣にハあらで、機のこと、意をを語

ふかるゝの切ちする故よちゝあめのことばにいふへきものといへるなり

天漢夜船滂而雖明将相等念夜袖易受将有

あまのがはよふねをこぎてあけぬともあはんとぞおもふよそでかへずあらん

あはんとおもふよそでかへずして、夜のあけるまでとりかはすことのぬれバころもひつかず

あらんとりかへ、二の句より結句へ見るべし

遥嬬等手枕易寐夜雞音莫動明者雖明

とほづまとたまくらかへてねたるよハとりがねなきそあけばあくとも

手枕かへてハふるき袖のかはりてこと嬬ハ嬬の誤なり

尓ヲ奈ニ誤

相見久猒雖不足稲目明去来理舟出為牟孋

あひみらくあきたらねどもいなのめのあけゆきにけりふなでせんつま

いなのめの枕詞、意ハあさのめのことに代れり

左昼始而何太毛不在者白栲帯可乞哉戀毛不過者

さねそめていくだもあらねバしろたへのおびこふべしやこひもつきねバ

さハ幾度にいくだハいくばくの意なり、だくとうだとらうのとだに、あらねバ

つきねバならずあらぬまへつきぬまのこと、おもひとて、解なし帯をこふ

牽牛のつきぬるまで帯こふべしやいかに、織女の情むすべし、元暦本過を過ぎて、

きかぎねバとなり

萬世携手居而相見鞆念可過戀爾有莫國

よろづよにたづさはりゐてあひみともおもひすぐべきこひならなくに

あひみることハあるまじ之爾乃米介乃之唐本によりてあく説

萬世可照月毛雲隠苦物叙将相登雖念

よろづよにてるべきつきもくもがくれくるしきものぞあはむとおもへど

百代に照べき月もくもに隠れて苦しき意なり、二首ともに百代にあらん

ことハ思へど、一夜を経ても苦しといふこゝの

白雲五百遍隠雖遠夜不去将見妹當者

しらくものいほへがくれてとほけどもよひさらずみむいもがあたりは

天河を云へるにはあらねど、おなじく妹がある所へいやちかく

為我登織女之其屋戸爾織白布織弖兼鴨

わがためとたなばたつめのそのやどにおるしろたへハおりてけむかも

そのやどハ織女のやどをいふ、[illegible]まてよめるなり

君不相久時織服白栲衣垢附麻弖爾

きみにあはでひさしきときゆおるはたのしろたへごろもあかつくまでに

織女によめるにてよめり。衣服をよまでたてよみか、秋夕と結句より[illegible]て見べし

天漢梶音聞孫星與織女今夕相霜

あまのがはかぢのときこゆひこぼしとたなばたつめとこよひあふらしも

和名抄爾雅云、子之子為孫、無万古、一名比古とあれバ、[illegible]

秋去者河霧天川河向居而戀夜多

あきされバかはぎりたてるあまのがはかはにむきゐてこふるよぞおほき

後撰集に川ぎりわたりてあまの川ぎり立渡るとあれバ、霧の

下渡の字を脱せるか、元暦本向居而を而向居と有、かはにむかひゐてと訓

優し

吉哉雖不直奴延鳥浦嘆居告子鴨

よしゑやしたゞならずともぬえどりのうらなげをるとつげんこらがも

直ちにいはざれども、人傳にも妹に言傳せまほしきよしをいへるなり

といへるこゝろは妹をさして

一年爾七夕耳相人之戀毛不過者夜深往久毛

ひとゝせになぬかのよのみあふひとのこひもつきねばよのふけゆくも

つきねばは待のつきぬるのこゝろ、元暦本過を過と有

一云不盡者佐宵曽明爾来

天漢安川原定而神競者磨待無

あまのがはやすのかはらのさだまりてかんつどひはときまつなくに

神代の天安河原に集ひ給ふ時を喩へてよめるを、二星のつどひは一とせに只

一夜のみと定まりたるを、昔の神競はかゝるべしとあれど、古への詞と

なし、競ハ集同じ意なれば、つどひと訓べし、磨ハ時の借字の例、借字ハ

清濁にかゝはらぬ例にて前にもさまざま定めたる、或人説に而ハ西の字の誤、

競ハ鏡の誤なるべし、やちよのかゞみふきあふしかゞみのかゞみのごとくまつなくにと

訓べし、これは月を神代の鏡にたとへて、此鏡ハ磨ぐをまつことなくして、いつも

てりかゞやくに、又七夕の妻を待てといふ例、考ふべし

此歌一首庚辰年作之　庚辰ハ天武天皇白鳳九年也

右柿本朝臣人麻呂歌集出　右三十八首ともに人麻呂歌集の内

ざるのハ諸國寄集かゝるべし

棚機之五百機立而織布之秋去衣孰取見

たなばたのいほはたたてゝおるぬののあきさりごろもたれかとりみむ

いほはたハ機の数多きをいふ、秋さり衣ハ秋されば、のされの誤の如く

秋になれる衣なり、秋の衣をとりてされらさりごろもハ衣裳なるべし、

てきるらんといふこゝろ、字ハ秋去ハ和布の字の誤なり、ふぎたへごろもさ

らんといへり

年有而。今香将巻。烏玉之。夜霧隠。遠妻手乎

としはありて。いまかまくらん。ぬばたまの。よぎりがくれる。とほづまのてを

としのうちにハ一とせまちくらせてん

吾待之。秋者来沼。妹與吾。何事在曽。紐不解在牟

わがまちし。あきはきたりぬ。いもとわと。なにごとあれぞ。ひもとかざらん

あれぞハあればぞの心。何事ありてか紐解てねざるべきといへる

年之戀。今夜盡而。明日従者。如常哉。吾戀居牟

としのこひ。こよひつくして。あすよりは。つねのごとくや。わがこひをらん

一とせ待くらしし思ひを此一夜にあかしてといへる

不合者。氣長物乎。天漢。隔又哉。吾戀将居

あはなくは。けながきものを。あまのがは。へだてゝまたや。わがこひをらん

あはなくハあはぬを延ていへる

戀家口。氣長物乎。可合有。夕谷君之。不来益有良武

こひしけく。けながきものを。あふべくある。よひだにきみが。きまさざるらん

七夕の宵ハ織女の待ほどの心なり

牽牛與。織女。今夜相。天漢門爾。波立勿謹

ひこぼしと。たなばたづめと。こよひあふ。あまのかはとに。なみたつなゆめ

織女を後世おりひめとよめど、たなばたつめとよむべき事此歌にてもしるべし

秋風吹。漂蕩。白雲者。織女之。天津領巾毳

あきかぜの。ふきたゞよはす。しらくもは。たなばたづめの。あまつひれかも

雲を領巾に見なしたるハ、天之白雲の毛のやうなるに比し領巾に過しをいへつ

數裳。相不見君矣。天漢。舟出速為。夜不深間

しばしくも　あひみぬきみを　あまのがは　ふなでとくせよ　よのふけぬまに

しばしくもは暫くも也

秋風之清夕天漢舟榜度月人壯子

あきかぜの　きよきゆふべに　あまのがは　ふねこぎわたる　つきひとをとこ

月人をとこは月をもいふ　壯子をとこ

天漢霧立度牽牛之檝音所聞夜深往

あまのがは　きりたちわたり　ひこぼしの　かぢのおときこゆ　よのふけゆけば

君舟今榜来良之天漢霧立度此川瀬

きみがふね　いまこぎくらし　あまのがは　きりたちわたる　このかはのせに

此川の瀬は天の川瀬をいふ

秋風尓河浪起暫八十舟津三舟停

あきかぜに　かはなみたちぬ　しましくは　やそのふなつに　みふねとゞめよ

八十の舟津は津の多きをいふ　三舟の三は借字にて御舟也

天漢川聲清之牽牛之秋榜船之浪跡香

あまのがは　かはおときよし（かはとさやけし）　ひこぼしの　あきこぐふねの　なみのさわぎか

跡は躁の俗字　字書に秋は速の誤にて早榜船をかいのちるもとをいふ
にて天漢を川と河とに訓る下学の事

天漢川門立吾戀之君来奈里紐解待

あまのがは　かはとにたちて　わがこひし　きみきますなり　ひもときまたん

一云天川河向立（かはにむかひたち）

あまのがは　かはとをりて　としつきを　こひこしきみに　こよひあへるかも

天漢川門座而年月恋来君今夜會可母

をりては待居てと也

明日従者吾玉床乎打拂公常不宿孤可母寐

あまよりはわがたまくらをとうちはらひきみとしいねずてひとりかもねん

まにはうくりに猶く

天原往射跡白檀挽而隠在月人壮子

あまのはらゆきてやいるとしらまゆみひきてかくせるつきひとをとこ

月人をとこハよるよあるハ皆彦星のすとききこゆると、そのく月の
るとせんもいづくされど、こやの句ハ夕月の隠てとゝいへる也、往射
跡三字解べりしべく、借字有べし

此夕零来雨者男星之早榜船之賀伊乃散鴨

このゆふべふりくるあめハひこぼしのはやこぐふねのかいのちるかも
ちるの夕べ降雨ハ彦星のとはといそぎこぐ舟のかいのしづくの垂れ
るかよしらん

天漢八十瀬霧合男星之時待船今榜良之

あまのがハやそせきらひぬひこぼしのときまつふねハいまこぐらし

ひまつハ杜待ゐるさまを云

風吹而河浪起引船丹度裳来夜不降間爾

かぜふきてかハなみたちぬひきふねにわたりもきませよくだゝぬまに

風波立く、ちぐんるすあやうければ引き船して渡りきませよくだゝぬまに
ちしてうくまにうこまてよれてる

天河遠度者無友公之舟出者年爾社候

あまのがハとほきわたりハなけれどもきみがふなでハとしにこそまて

天河打橋度妹之家道不止通時不待友

あまのがハうちはしわたせいものいへぢやまずかよハんときまたずとも

うちはしハ打こよしとうとの宝もちこしうちはしかよう也捨まて、
をとこえ嫁しやをせバいつの

月累吾思妹會夜者今之七夕續巨勢奴鴨

つきかさねわがおもふいもにあふよひはいましなゝよをつぎてせぬかも

いましのしハ助辞なり今七夜續けかしと願なり

年丹裝吾舟榜天河風者吹友浪立勿忌

としにようふわがふねこがんあまのがはかぜはふくともなみたつなゆめ

としに一たびよそひてこぐ舟〓るべし

天河浪者立友吾舟者率榜出夜之不深間爾

あまのがはなみはたつともわがふねはいざこぎいでんよのふけぬまに

直今夜相有兒等爾事問母未為而左夜曾明二来

たゞこよひあひたるこらにことゝひもいまだせずしてさよぞあけにける

人のまだいひよるまじくかくいへるとよむべし

天河白浪高吾戀公之舟出者今為下

あまのがはしらなみたかしわがこふるきみがふなではいましすらしも

機蹋木持往而天河打橋度公之来為

はたものゝふみきもちてゆきてあまのがはうちはしわたすきみがこんとあ

機和名抄云國語注云織ヶ設經緯以機成繒布也揚氏漢語抄云高機多加波太ともゝ又辨色立成云機蹋万祢岐蹋踏也とあるふみきとよめるハ此機蹋の

天漢霧立上棚幡乃雲衣能飄袖鴨

あまのがはきりたちのぼるたなばたのくものころものかへるそでかも

古織義之八多年此暮衣縫而君待吾乎

いにしへゆおりてしはたをこのゆふべころもにぬひてきみまつわれを

義ハ義の借字なりこれをのちの〓〓〓ころなし誤写

足玉母手珠毛由良爾織旗乎公之御衣爾縫将堪可聞

あしだまもただまもゆらにおるはたをきみがみけしにぬひあへんかも

神代紀手玉玲瓏(タマモユラニ)織紝之(ハタオル)少女(ヲトメ)者、是誰之子女耶(ムスメナルカ)、仁徳紀、四十年爰皇后

ミこハ皇女所賞之足玉手玉、米千一新宮をふみまづの子がくきむなり

あとしよめり、ゆらハ鳴る音之旗ハ借字にて機之

擇月日逢義之有者別乃惜有君者明日副裳欲得

つきひえらびあひてしあれバわかれのをしかるきみハあすさへもがも

義ハ義の誤、別の下乃ハ久の誤なるべし、あすさへもがもハ明日もみまほさ

せゞねのごとく

天漢渡瀬深彌泊船而棹来君之檝之音所聞

あまのがはわたりせふかみふねうけてこぎくるきみがかぢのおときこゆ

棹ハ榜をんでこぎと訓べし

天原振放見者天漢霧立渡公者来良志

あまのはらふりさけみればあまのがはきりたちわたるきみハきぬらし

これハ嘉句の意をもちて袁等の来るを下つ国までもやりてよめるなり

天漢瀬毎幣奉情者君乎幸来座跡

あまのがはせゞにぬさをたてまつるこゝろハきみをさきくきませと

袁等のみるく来ませむとあるよ、織女の辞なるべし

久方之天河津爾舟泛而君待夜等者不明毛有寐鹿

ひさかたのあまのがはづにふねうけてきみまつよらハあけずもあらぬか

あけずしてあらぬかのかハ、がなるあれかしのこと

天河足沾渡君之手毛未枕者夜之深去良久

あまのがはあぬらしわたりきみがてもいまだまくらねばよのふけぬらく

袁等の手枕せしことも、まだねぬに、夜のまのふけぬるをいふ、官本久を之は

似るハ之を以てハてふ付ハぞて

渡守船度世乎跡呼音之不至者疑梶之聲不為

わたりもりふねわたせをとよぶこゑのいたらねばかもかぢのおとせぬ

和名抄云渉人わたしもり日本紀云渡子和太之毛利一云和太利毛利とあり、巻十八にも、和多理母理とあれば、わたりもりのこなたの洲へ、わたりせをば、わたせよといふよびし、巻七にも氏河を船令渡呼跡（フネワタセヲト）よべども、きこえざるらしかぢおともせぬ

真氣長河向立有之袖今夜巻跡念之吉沙

まけながくかはにむきたちありしそでこよひまかんとおもふがよさ

日久しく待ちて来し袖をこよひまかんとおもふのがよきさへ

天漢渡湍毎思乍来之雲知師逢有久念者

あまのがはわたりせごとにおもひつゝこしくもしるしあへらくおもへば

こしくのくハ助辞、こしくもしるしハ来しかひありしといふこと、あへらくハあへるを延ていふ

人左倍也見不継将有牽牛之嬬喚舟之近附往乎

ひとさへやみつがずあらむひこぼしのつまよぶふねのちかづきゆくを

見つがずてあらんハ見ずしておかんや、かのちかづきゆくを、彦星の織女を舟にてむかへにゆかるゝさまによめり

一云見乍有良武（ミツヽアルラム）

天漢瀬宇早鴨烏珠之夜者闌爾乍不合牽牛

あまのがはせをはやみかもぬばたまのよはふけにつゝあはぬひこぼし

瀬をはやみかも瀬の早くてかとなり

渡守舟早渡世一年爾二遍往来君爾有勿久爾

わたりもりふねはやわたせひとゝせにふたゝびかよふきみにあらなくに

玉葛不絶物可良佐宿者年之度爾直一夜耳

たまかづらたえぬものからさぬらくはとしのわたりにたゞひとよのみ

ものからハ物なるを、あふらくハ相なるらん、さハ發語、ぬらくハぬるを延ていふ

戀日者氣長物乎今夜谷令乏之應哉可相物乎
こふる日はけながきものをこよひだにともしむべしやあふべきものを
よみ人しらず　人まろのかしうに出たり

織女之今夜相奈婆如常明日乎阻而年者将長
たなばたのこよひあひなばつねのごとあすをへだてゝとしはながゝらん
あすをとほしハ明日の一日をへだてゝそれよりまたのあふまでといふ

天漢棚橋渡織女之伊渡左牟爾棚橋渡
あまのがはたなはしわたせたなばたのいわたらさんにたなはしわたせ
棚をわたせるが棚のごとくなれバ棚橋と云。わたらさんのいハ發語。こハ織女の心をよまれ
よみ人しらず

天漢河門八十有何爾可君之三船乎吾待将居
あまのがはかはとやそありいづくにかきみがみふねをわがまちをらん

やそせでのはハ八十渡舟合とよめり三ハ借字にて御也

秋風乃吹西日從天漢瀬爾出立待登告許曽
あきかぜのふきにし日よりあまのがはせにいでたちてまつとつげこそ

天漢去年之渡湍有二家里君将来道乃不知久
あまのがはこぞのわたりせあれにけりきみがきまさんみちのしらなく
有を荒に借るはいづれも、路の事なるより、絶々になりたるならん

天漢湍瀬爾白浪雖高直渡来沼待者苦三
あまのがはせゞにしらなみたかけれどたゞわたりきぬまてばくるしみ
彦星の渡来りしを詠り。待ハ織女の迎へまつると詠之

牽牛之嬬喚舟之引綱乃将絶跡君乎吾念勿國
ひこぼしのつまよぶふねのひきづなのたえんときみをわがおもはなくに
和名抄云唐韻云牽綾（天豆奈）挽船縄也とみえたれバ、こゝもひきづなとよむべし

去ヲ出ニ誤

借ヲ惜ニ誤

むとつけさせ、吾の下一本久の字あり、之の誤か

渡守舟出為将去今夜耳相見而後者不相物可毛

わたしもりふねでしいでんこよひのみあひみてのちはあはじものかも

彦星の言なるべし、去を本出と有、一本によりて改

吾隠有檝棹無而渡守舟将借八方須史者有待

わがかくせるかぢさをなくてわたしもりふねかさめやもしばしはありまて

織女の言なるべし、檝棹をかくしたれば、渡もりも舟かすべきや、しばしまてよといへり、借を本惜に作る、又誤なれば今改

乾坤之初時従　天漢射向居而　一年丹

あめつちのはじめのときゆあまのがはいむかひをりてひとゝせに

両遍不遭　妻戀爾物念人　天漢安乃川原乃

ふたゝびあはぬつまごひにものおもふひとあまのがはやすのかはらの

出出ハ歳ノ誤具ハ曽ノ誤

荒ハ荻ノ誤具ハ曽ノ誤

鳴ハ鳥ノ誤

有通　出出乃渡丹　具穂船乃艫丹裳舳丹裳船装

ありがよふとしのわたりにそほふねのともにもへにもふなよそひ

真梶繁抜　旗荒　本葉裳具世丹秋風乃吹来

まかぢしゞぬきはたすゝきもとはもそよにあきかぜのふきくる

夕丹　天川白浪凌　落沸　速湍　渉

よひにあまのがはしらなみしのぎおちたぎつはやせわたりて

稚草乃妻手　枕迹　大船乃思憑而　榜来等六

わかくさのつまをまかむとおほぶねのおもひたのみてこぎくらん

其夫乃子我荒珠乃　年緒長　思来之　戀将

そのつまのこがあらたまのとしのをながくおもひこしこひつくすら

盡七月　七日之夕者　吾毛悲烏

らんふみづきのなぬかのよひはわれもかなしも

いへるひのいは袁語、独去人は彦星をさして、出出は歳の字の誤なるべし
のわたりもあるか、よりて年之度とよめり、其穂船の舟は舟のかきあやまりか
誤れるか、宣長は其の誤なりといへり、巻三まで赤乃曽保船とよめり、
くわしくはよく説あれど、其を清音のつねに用ひし例なく、出もへ
の誤に訓ることしあなれば、しからば、荒は萩の誤ならん、神功紀に幡
萩穂出吾也とあり文或人は荒は簀木二字の一字に誤れるならんといへり、
さもあるべし、本業黨具世舟の具も、曽々其の誤なるべし、秋風のそよ
そよと吹るなるを、わか子の大舟の枕詞、妻この手に、此妻は織女をいふ、
こよまの子は彦星をいふ、ゆへにもきらんとは、ゆめのかきわをまちてらんと
いふなれもかなしも、ぬかつ風なく舟係くなり、しむ鳥一本馬に作

反歌

狛錦紐解易之天人乃妻問夕叙吾裳将偲

こまにしきひもときかはしあめびとのつまとふよひぞわれもしのばん
和名抄云、本朝式有暈繝錦、高麗錦、軟錦、両面錦等之名、云々、
とあり、狛錦は此高麗錦なり、巻三倭文たての帯解替てとよめり、
あめびとの彦星なり、古訓ひこぼしとあり、さてよむべくもあれど此々法句
も下つゞきよろしきなり

彦星之川瀬渡左小舟乃得行而将泊河津石所念
ひこぼしのかはせをわたるさをぶねのえゆきてはてんかはづしおもほゆ
さは袁語なりと舟の得行而、よみてはんとよむべしとも、いそれき、されども、ことの
よむべくもおぼえず、真淵の説に、えゆきてはてんとよまん、この巻十一両処
ふかも得為せむ、などよめりといへるの説をなすを

天地跡。別之時従。久方乃。天驗常。豆大王。
あめつちとわかれしときゆひさかたのあまつしるしとさだめてし。

天河原爾。　璞。　月累而。　妹爾相。時候
あまのがはらにあらたまのつきをかさねていもにあふときさもらふまつ
跡立待爾。　吾衣手爾。秋風之。　吹反者。　立坐
とたちまつわがころもでにあきかぜのふきかへらへばたちてゐて
多土伎守不知。村肝。　心　不欲。　解衣　思
たどきをしらにむらきものこゝろおぼえずときぎぬのおもひ
亂而。何時跡。　吾待　今夜。此川。　行長有得鴨
みだれていつしかとわがまつこよひこのかはの。

よは久方の天つ印と水無川をへだてゝ置し、足ハ定の借く、大王とてしの
うなよ由くる依頼あらずして、候をさもらふとよまんかたのふさくしやおぼえ
ずの納得すしるて、宮もハ欲ハ歓の誤まて心不歓ハこゝろまどへく訓
べしとおもふ、村きもの、ときぎぬの枕詞、行長有得鴨ゆきながくあらんかも

と訓るハ何のことかわかし、行ハ待の誤まりてまちつゝながくありえてんの
と訓んとしても猶ハいまだれつれども此川のとまでよまつづきがたし、故に、行をとまて
しを行せまで誤れるにの、去ての事ハ河をしらんかを訓べしとすて得の上下の字を脱
せしの、去るしばあまがのとめつかりく訓べき也、猶考へべし

反歌

妹爾相。時片待跡。久方乃。天之漢原爾。月叙經来
いもにあふときかたまつとひさかたのあまのかはらにつきぞへにける
片待ハ下待也、ちの時守、その河原にありてつきをかさねて過ぎたる
るこゝと

010190519207